



教皇庁シノドス事務局

シノドス

実施ステージの旅程

2025–2028



シノドス流の教会

交わり、参加、宣教

わたしたちは「宣教する教会であり、橋
を築き、対話を促す教会、このサンピエ
トロ広場のように両翼を広げ、わたした
ちのいつくしみ、存在、対話への意欲と
愛を必要としているすべての人を受け入
れる、つねに開かれている教会」（教皇レ
オ十四世）なのです。

わたしたちは、靈的に非常に激しい時代を生きています。教皇フランシスコの逝去は、わたしたち全員に深い衝撃を与えるました。わたしたちは、主がフランシスコをその平安のうちに迎え入れ、教会への奉仕に対して報いてくださることを今も祈っています。同時に、シノダリティの歩みを最初から後押しし、わたしたちは「宣教する教会であり、橋を築き、対話を促す教会、このサンピエトロ広場のように両翼を広げ、わたしたちのいつくしみ、存在、対話への意欲と愛を必要としているすべての人を受け入れる、つねに開かれている教会」¹であることを思い出させてくれた、教皇レオ十四世の選出を、神に感謝しています。

これは、2024年10月26日、シノドス総会第2会期の終わりに承認された、世界代表司教會議（シノドス）第16回通常総会「シノドス流の教会——交わり、参加、宣教」の『最終文書』にも深く刻み込まれている信念と軌を一にするものです。シノドス流の教会の形態は、その使命のために奉仕するものであり、教会生活におけるあらゆる変革は、現代の人々に神のみ国をのべ伝え、主の福音をあかしする能力を高めることを意図しています。これが、『最終文書』を忠実に解釈し、そして何よりもそれを実践するための鍵です。わたしたちは、暴力と果てしない戦争の渦に巻き込まれた世界に生きており、共通善と平和のために、出会いと対話の機会を創出することにますます苦闘しています。これまで以上に、この世界は、どのようにすれば、「キリストにおけるいわば秘跡、すなわち神との緊密な交わりと全人類一致のしるし、道具」となれるのかを知っている教会を必要としています（『教会憲章』1項。『最終文書』56項参照）。この世界のさまざまな状況において、今回のシノドスは「公会議のさらなる受容の行為となるものであり、公会議のインスピレーションを継続させ、現代社会のためにその預言的な力を再び發揮させるものなのです」（『最終文書』5項）。

この使命の緊急性が、わたしたちを今回のシノドスの実践へと駆り立てています。これは、すべての洗礼を受けた人が責任を共有する務めです。世界中の多くの地方教会が、この道を熱心に歩んでいます。わたしたちは、それらの教会に感謝し、寛大な心でその旅を続けていくよう呼びかけたいと思います。つまりそれらは、教会全体にとって貴重な取り組みを行っているからです。この文書は、彼らに考察の枠組みを提供するとともに、何よりも、彼らの取り組みを共有し、より広範な教会的識別に貢献するよう呼びかけます。他の教会は、実施ステージをどのように進めるべきかをまだ検討中、あるいはその第一歩を踏み出したところです。わたしたちは、実践的であれ本質的であれ、抵抗や困難に直面しても、自由と大胆さをもって、勇敢に前進するよう彼らを励まします。つまり、彼らも貴重な貢献ができるからです。彼らの声が沈黙したままでは、教会全体にとって損失となるでしょう。

¹ 教皇レオ十四世「最初の祝福」（2025年5月8日）。

シノドス事務局は、彼ら全員の要望に応え、彼らの声に耳を傾け、彼らに同伴し、彼らの努力を支援し、そして何よりも、教会全体の利益と一致のために、各教会間の対話とたまものの交換を活性化することに貢献し続けます。これが、昨年3月11日に教皇フランシスコからゆだねられた、シノドスの実施ステージに同伴する任務を遂行するわたしたちの方針です。教皇レオ十四世は、去る6月26日、シノドス第16回通常総会のシノドス事務局「通常評議会」第1回会合で、このことを確認し、わたしたちがこれを継続するよう激励しました。その意図は、各地方教会の責任を損なうことなく、「異なる諸教会の文脈を横断してこの受容を調和させながら」²、教会の一致に深い配慮を払い、この歩みを前進させることです。この歩みを『最終文書』が指示する方向性に沿わせることにより、「この目的は、諸教会間で、また特定の教会の内部で、たまものの交換という展望を具体的に実現すること（120-121項参照）」³になるのです。

ここで提案する『旅程』は、こうした働きの視点に立脚しています。わたしたちは、シノドスの旅路の主体である神の民全体と、とりわけ司教／東方教会司教、シノドス・チームのメンバー、そして実施ステージにさまざまな形で携わるすべての人々に、この『旅程』をお届けします。その意図するところは、彼らにわたしたちからのサポートを感じてもらい、シノドスの歩み全体を特徴づけてきた対話を継続することです。本文書の内容は、実際、ここ数カ月にわたって各教会から寄せられたフィードバックや、彼らが共有してきた経験の成果に根ざしています。各教会から寄せられる意見や質問、そして有用と思われる事項に基づいて、本事務局は、シノドスの実施ステージをさらに実り多いものにするよう願いながら、共同の取り組みに同伴し支援するための、さらなる洞察とツールを提供していきます。

わたしたちが神の民としてともに歩む、シノドスの旅路の新たな一歩を、使徒たちの元后、教会の母であるマリア、そして今日祭日を迎える聖ペトロと聖パウロの執り成しにゆだねましょう。

バチカン、2025年6月29日

聖ペトロ聖パウロ使徒の祭日

教皇庁シノドス事務局長
マリオ・グレック枢機卿

² シノドス事務局長マリオ・グレック枢機卿「シノドスの実施ステージにおける同伴の歩みに関する書簡」（2025年3月15日）。

³ 同。

概要

この『旅程』は、シノドス事務局が、「通常評議会」の賛同を得て作成し、教皇レオ十世によって認可されたもので、シノドス事務局が、シノドスの実施ステージにおいて同伴のために行う働きの一端です。この『旅程』には、二つの目的があります。一つには、世界中の地方教会に、ともに歩むことを容易にする共通の枠組みを提供することです。もう一つは、2028年10月の「教会総会」に向けて、3月15日付の書簡で既に伝えた以下のステージにしたがって、教会全体をリードする対話を促進することを目的としています。

- 2025年6月～2026年12月：各地方教会およびその連合体における実施のための活動
- 2027年上半期：教区／東方教会教区における評価会議
- 2027年下半期：各国司教協議会および司教協議会連盟、東方諸教会の位階的組織、その他の教会の連合体における評価会議
- 2028年第1四半期：大陸別評価会議
- 2028年10月：バチカンでの「教会総会」

この『旅程』の文書は、他の人々が必要に応じて参照されるでしょうが、実施ステージを概説し、ここ数カ月にわたり本事務局に頻繁に寄せられた基本的な質問に答えていきます。その構成は以下のとおりです。

1 実施ステージとはいかなるもので、その目的は何か

2 実施ステージに参加する人は誰か。彼らの役割と責任は何か

- 2.1 教区／東方教会教区司教の責任
- 2.2 シノドス・チームと参与機関の任務
- 2.3 各教会の連合体の役割
- 2.4 シノドス事務局の働き

3 実施ステージの間、『最終文書』にどう取り組むか

- 3.1 全体的ビジョンの維持
- 3.2 具体的取り組みへの資源投入

4 実施ステージの間、わたしたちの進路を形づくるため、どの方法やツールが役立つか

4.1 教会的識別

4.2 歩みを設計し、同伴するためのシノドス的アプローチ

**実施ステージでは、教会の生活をよりシ
ノドス的なものとする、新しい実践や組
織を検討することを目指します。**

1. 実施ステージとはいかなるもので

その目的とは何か

これは、使徒憲章『エピスコパーリス・コムニオ』(2018年9月15日) 第19条から21条に規定されている、シノドスの三つのステージのうちの最後のものです。これは、神の民への意見聴取と聞き取りのステージ(2021年から2023年の間に実施)、世界代表司教会議(シノドス)総会の2回の会期(2023年10月と2024年10月)を含む祝祭のステージに次いで、神の民への聞き取りをもとに実施された識別をまとめたものです。『エピスコパーリス・コムニオ』は次のように説明しています。「シノドスの歩みは、その出发点だけでなく、その到達点も神の民のうちに存在します。聖靈によって注がれた恵みのたまものは、総会に集う司教たちを通して、この神の民に注がれるべきものです」(7項)。

実施ステージは、2024年11月24日の「教皇フランシスコによる付記」で始められ、この文書の中で、教皇は『最終文書』を教会全体にゆだねました。シノドス制度の歴史上、前例のない行為として、教皇は、『最終文書』が「ペトロの後継者の通常の教導権に数えられるもの」(『エピスコパーリス・コムニオ』第18条第1項、『カトリック教会のカテキズム』892項参照)と宣言し、そのように受け取るよう求めていました。したがって、実施ステージの参照点は、『最終文書』の全体となります。同時に、この「付記」は、その適用にはさまざまな調整が必要であると指摘しています。「地方教会とその連合体は、

種々の法や本文書自体が定める識別と意思決定プロセスを通して、文書に示されている権威ある指示をおののの文脈に応じて実現していくよう、今すでに求められています」(同)。

実施ステージでは、教会生活をよりシノドス的なものとする、新たな実践や構造を検討することを目指しており、それは『最終文書』で概説した全体像に始まり、福音宣教の使命をより効果的に遂行する目的で行われます。この働きには、必要な神学的・教会法的研究が含まれ、そして何よりも、さまざまな地域の実情においてもっとも適切で、成果が見込めるものを識別する取り組みが含まれます。具体的にいえば、優先事項は神の民に新たな機会を提供し、ともに歩み、こうした経験について振り返り、その成果を宣教のために受け取り、それらを分かち合うことです。

経験の重要性が強調されるからといって、実施ステージが、ローマから要求されるある種の演習や追加の任務で構成されるわけではありません。それは、各教会の日常の生活の一部であり、その日々の実践にひらめきを与えるものです。すべての地方教会、すべての小教区共同体は、日常の司牧活動の中でシノダリティを実践し、聖霊が今日わたしたちに求めている教会的識別を通じて、その使命の遂行方法を改善することができるでしょう。『最終文書』は、各地方教会もまた、「さまざまな教会の現場において、シノドス流の確かな回心を実現するための具体的道筋と養成方法」を見出していくよう求めています(9項)。したがって、実施ステージでは、教会生活やその組織・機構の役割に目に見える影響をもたらすことを目指します。もしそれが抽象的な仮説の策定にとどまってしまうならば、その目的を果たすことはできず、何よりも、これまでシノドスの歩みによって生み出されてきた熱意とエネルギーが失われてしまうでしょう。

さらに、実施ステージは、唯一の教会の中で、各地方教会の交わりを育てる、たまもの交換を継続する機会であり、正当な多様性を尊重しつつ、その普遍性が示されるのです。シノダリティを実践するための新たな方法をひらめかせ、宣教の実りを高める創造性は、こうした違いから生み出されます。だからこそ、さまざまな状況において得られた経験の成果を共有し、各教会間の対話を深めることが必要なのです。実施ステージにおいては、したがって、『最終文書』に基づき、各教会内および教会間で、新たな対話のプロセスが始まります。

実施ステージは後退することを意味するものではなく、また、既に経験したものの大なる繰り返しを提案するものでもないことも強調されるべきです。手順と目標は根本的に異なるものです。参照点は『最終文書』であり、それは、すべての教会から集まった司牧者たちが識別の歩みの最後に到達した合意を表明しており、これは、ペトロの後継者の通常の教導権の一部として、進むべき方向性を示すことで、神の民全体に責任を任せるもので

す。むしろ、この数ヶ月のさまざまな教会の経験は、これまでのステージでの歩みと、そこから学んだことを振り返ることがいかに実り多いことかを示しています。そうすることで、他の教会や教会全体がかかわった歩みの成果が、その地方教会に還元されるのです。

シノドス流の教会として成長するには、経験によってのみ得られる知識が必要であり、それによってわたしたちは、主との出会いに導かれます。これは、シノドス総会の参加者が身をもって体験したことです。『最終文書』が、次のように証言することから始まっているのは、偶然ではありません。「靈における会話を味わい、互いに耳を傾ける中で、わたしたちの間に主の現存を感じていました。聖靈をお与えになることによって、ご自分の民の間で、多様性の調和である一致へと駆り立て続けておられるかたの存在です」(1項)。これはまた、各地方教会やさまざまな教会の連合体においても、これまですでに、そして今もなお、体験され続けていることです。

実施ステージは、「希望の聖年」が始まる直前に始まりました。この偶然の一致から、わたしたちは数ヶ月後に重要イベント、つまり、2025年10月24日から26日に開催予定の「シノドス・チームと参与機関のための祝祭」を、シノドス事務局主催で開催するよう決定しました。このイベントは、神の民全体との一致のうちに、深い靈的な時をともに体験する恵みとなるでしょう。それはまた、きずなを築き、経験を交換し、さらに続くイベントに向けて、自分たちをよりよく調和させていくための機会となるでしょう。

2. 実施ステージに参加する人は誰か

彼らの役割と責任は何か

実施ステージは、眞の意味で教会的なプロセスです。そこには、『最終文書』の受け手としての役割を担うすべての教会が含まれ、したがって、神の民全体、女性も男性も、幅広い範囲のカリスマ、召命、奉仕職を有する人々が含まれ、この実施ステージは彼らによって豊かにされ、さまざまな形で、具体的に生きられるのです(キリスト教小共同体ないし教会基礎共同体、各小教区、諸団体や運動体、男女奉獻生活者の共同体など)。シノダリティは「教会を成り立たせているもの」(28項)であるため、この旅程は、「支持者」の中心グループだけに限定されたものであってはなりません。むしろ重要なのは、この新たな歩みが、互恵の精神のうちに、「男女を問わず洗礼を受けたすべての人による参画と、共同責任の分担行使の可能性を広げる」(36項)よう、具体的に貢献することです。さらに、極めて重要なことは、今回のシノドスによって確立された教会刷新の歩みの周縁部に

これまで取り残されてきた人々を、このステージに関与させるよう目指すことです。それは、「異なる文化的アイデンティティや社会状況をもつ人々や集団、なかでも貧しい人や排除された人の間」（同）にいる人々です。数多くの教会が、耳を傾ける教会となることを日常の一部とする取り組みを始めており、また多くが、若者たちの声に耳を傾けることを優先課題にしていると報告しています。さらに、シノドスの歩みに疑いや抵抗を示している人々に耳を傾けることにも、とくに注意を払うべきです。つまり、真にともに歩むためには、彼らの視点からの貢献を失ってはなりません。

このため、すべての教会は、キリスト教共同体が生きて働くさまざまな状況について、適切に耳を傾ける方法を模索し続けるよう招かれています。それは、聴き取りのステージで時おり見られたように、小教区の状況だけに限定するのではなく、むしろ学校や大学、相談・受入センター、病院や刑務所、デジタル環境といった状況も含まれます。同時に、実施ステージは、キリスト教共同体のさまざまな構成員の間の関係を強化する好機でもあります。それは「共通の使命のためのたまものの交換を盛り立てる」（65項）ためです。そこには、奉獻生活の会や使徒的生活の会と結びついた共同体や使徒職活動、さらに諸団体、運動体、新しく創立された共同体も含まれています。「こうした会の活動が、多くの個人や私的グループの活動を伴って、実にさまざまな場所へ福音を届ける」（118項）のであり、シノドス流の教会の旅路には、こうしたダイナミズムが必要なのです。

2.1. 教区／東方教会教区司教の責任

まさにこれは、この用語の完全な意味における、「教会的な」歩みであるため、各地方教会における実施ステージの第一の責任者は、教区／東方教会教区の司教です。つまり、この歩みを始め、その期間、方法、目標を公に示し、その進捗に寄り添い、その結果を承認して終了させるのは、その司教の責任です。これは、次の『最終文書』の発言に沿って、シノドス流の仕方で権威を行使するのに、適切な機会となるでしょう。「司教に叙階される人は、特権や、自分一人で果たすべき任務を背負わされるのではありません。むしろ司教は、聖靈が個々人や共同体に注ぐたまものを認め、識別し、一致のうちにまとめ上げるという、恵みと役割を授かっています。そしてそれを、地方教会での奉仕職の務めに共同の責任を負う、司祭と助祭との秘跡的きずなのうちに行います」（69項）。このたまものを受け、この任務を遂行する人々は、教会共同体がともに歩んできた旅路と、それによって生み出された成果が有するシノドス的な性質を、権威をもって認め、確認することができます。このようにして教会の一致は促され、それは、聖ヨハネ・パウロ二世が、「教会の一致は、画一性ではありません。正当な差異を有機的に補完し合う一致です」（『新千年期の初めに』46項、『最終文書』39項に引用）と語ったとおりです。さらに、調和の主である靈の働きが現れます。聖靈は自由に働き、自らがふさわしいと思うところで、神の民の中で新たな取り組みを触発します。つまり、権威者の任務もまた、これらのたまもの

を認識し、そこにつねに内在する視野を広げる招きを受け入れ、その実りを育て、多様性を促進することにあります。そうすることで、教会の交わりを養うたまものの交換の可能性が豊かになるのです。

司教たちは、「各自の部分教会における一致の目に見える根源であり、基礎」（23 項）であり、彼らにゆだねられた神の民全員が、シノドスの歩みへ参加するよう促し、支えるよう招かれています。事実、あらゆる教区／東方教会教区には、参加を熱望する人々がおり、彼らの声に耳を傾けるべきです。つまり、彼らは情熱をもって喜んで自らをささげ、貴重な提案を提供することもできます。他方ではむしろ、靈の働きに心を開く助けを必要とする人たちもいます。まず自分自身の抵抗感に耳を傾けることから始める必要があるのです。この任務を効果的に実行するために、教区／東方教会教区司教は、任命されている場合には協働司教および補佐司教に加え、以下の人たちを関与させるべきです。

- a) 司祭と助祭。彼らの任務は、「さまざまなカリスマの識別と、地方教会に対する同伴と導き」について、「一致の奉仕にとくに留意しながら」（72 項）、司教に協力することです。『最終文書』が指摘するように、シノドスの経験は、この現実に対する答えとなり、「司教、司祭、助祭が、職務遂行において共同責任を負っていること……を再発見する助けとなり」（74 項）、また彼らの奉仕職のシノドス的側面を再認識する助けとなるでしょう。さらに、このようにすることで、司祭たちのより一層の関与の促進も可能となるでしょう。
- b) 教区レベルの参与機関（司祭評議会、宣教司牧評議会、経済問題評議会）。これらの機関は、それぞれ独自の仕方で、教会的識別のプロセス、およびシノドスの実施により必然的に導かれる意志決定に関与します。『最終文書』が指摘している通り、「これら参与機関の運営に關し、シノドス流の作業法の採用を手始めにして対処するのは適切なことです」（105 項）。
- c) 教区／東方教会教区のシノドス・チーム。彼らは、この歩みを促進する上で、特別の責任を担います（以下の項を参照）。

多くの場所で経験されていることですが、『最終文書』の 87-94 項に基づく、教会的識別にシノドス流の作業法を採用したり、シノドス流の仕方で意思決定することは、司教の権威を損なうものではなく、むしろそれを堅固なものとし、下された決定の受容と実施を容易にすることです。

2.2. シノドス・チームと参与機関の任務

意見聴取のステージでは、シノドス・チームの活動が、いかに重要であったかが示されました。つまり、彼らは司教によって任命され、支援を受け、各地方教会がシノドス流の生活を、日常的に活性化するために不可欠なツールなのです。その貢献は、実施ステージにおいても必須です。したがって、現存するチームは評定され、必要に応じて刷新されるべきです。中断していたチームは活動を再開し、適切に組み入れられるべきです。これまで設置されていなかった地域では、新チームを設置すべきです。

その構成の基準は、意見聴取と聞き取りのフェーズで既に概説したとおりで、つまり、さまざまな年代、出身文化、養成の背景をもち、教会の多様な奉仕職とカリスマを代表する男女信徒、司祭・助祭、男女修道者です。したがって、その構成について世界中で有効な規則を定めることは不可能です。しかしながら、これまで得てきた経験から、検討するためのいくつかの提案を提示することはできます。

- a) 当該教区の生活と司牧活動との結びつきを容易にするため、教区の指導層の幾人かがチームに参加することは有益でしょう。
- b) まさに参与機関に推奨されているとおり（106 項）、宣教する志向性を確保し、自己言及的な態度に陥る危険を回避するため、日常生活や社会状況の中で、あかしや使徒的奉仕に積極的に従事している人々にも、シノドス・チームに参加してもらうことは重要でしょう。
- c) 他のキリスト教諸派や共同体、あるいは他宗教の代表者をオブザーバーとして招待することも検討に値するかもしれません。
- d) 司教がシノドス・チームの一員となることを妨げるものは何もありません。そうしない場合には、司教はその活動について定期的に報告を受け、適当な時期にチームと会合をもつべきです。

個々のメンバーに求められる要件としては、『最終文書』の知識は当然のことながら、シノドスのダイナミクス、とりわけ意見聴取や聞き取りのステージで経験したダイナミクスについて、直接体験することも不可欠です。近年、シノダリティについての学校や研修の取り組みが国内および国際レベルで創設されており、シノドス・チームのメンバーの事前準備の強化にも活用することができます。

ふさわしく多様な構成をなしているシノドス・チームであれば、それはより容易にシノダリティの実験室となり、神の民の間で推進するよう招かれているダイナミズムを、自分たち自身の内部で実験できるでしょう。

実施ステージにおける彼らの役割は、まず第一に、各地方教会が置かれている具体的な状況の中で、シノドスのダイナミズムの成長を促進し、支援することです。そのために、

養成のためのものも含め、適切なツールや方法論を特定し、必要な措置が確実に講じられるよう、必要な取り組みを実施します。シノドス・チームは通常、教区／東方教会教区レベルで編成されますが、可能であれば、地区または小教区レベルでも設置することが望ましい。さまざまな教会状況において、興味深い経験がすでに発展しており、これらのチームが互いに適切に連携することによって、シノドスの歩みをより広範に及ぶ、参加型のものにする貢献が可能なことを示しています。さらに、ファシリテーターの確保と養成を促進し、その活動を調整することも、促進する働きの一部です。

シノドス・チームの権限は、参与機関の権限と重複するわけではなく、相乗効果を追求する精神のもと、それと調整されます。シノドス・チームは、その教区／東方教会教区のシノドス流の活性化や養成に役立つよう設置されます。参与機関は、教会法によって規定された、能動的に協議していく任務を実行していくよう求められています。したがって、彼らの務めは、司牧上の優先課題を識別し、組織と意思決定プロセスを刷新しながら、シノドスの実施に必要な諸々の決定を入念に策定するよう貢献することです。定期的に調整を行い、タイムリーに情報を流すことで、各自の働きがより円滑に進むでしょう。

最終的に、シノドス・チームは、実施ステージの成果を収集するよう支援することが任務であり、そこには、評価のステージと、2027年に始まる予定のいくつかの会議も視野に入ります。ここでも、その教区共同体がともに歩んだ旅路との関連の中で、当該司教が報告書の有効性を認め、認証するかどうかを判断します。

2.3. 各教会の連合体の役割

『最終文書』もまた、公会議に根ざしたものであり、各地方教会は孤立した存在ではなく、とりわけ司教相互の交わり、さらに司教たちとローマ教皇との交わりを通して結ばれた、交わりのきずなの一端であることを、注意深く強調しています。

多くの場合、こうした結びつきは日常のものであり、共通の歴史、地理的近さ、パートナーシップ、移住、おそらくは人々の偶然の出会い、さらに現在では、ますますデジタルメディアを通じてなどの結果として、生まれています。現代の高度に接続された社会において、どの教区／東方教会教区も、良きにつけ悪しきにつけ、他の場所で起こる事柄の影響を受けずに、孤立して生きることなど考えられません。入念に計画されたものの結果ではない、こうした自然発生的な日常の結びつきは、わたしたちが生きる時代の産物です。しかし何よりもそれらは、わたしたちが認識すべき財産であり資源であり、それによって、わたしたちの教会のアイデンティティとなる経験を、ますます明確に表現できるようになるのです。

また、これらの結びつきは、法律によって規定された組織上の形態を取ることもあり、管区大司教座または教会管区、そして何よりも（各国および地域の）司教協議会、自治権を有する（*sui iuris*）諸教会の教会会議（シノドス）、各国司教協議会の国際会議といった機関が台頭しています。これらの組織も実施ステージにおいて役割があり、『最終文書』はそれを次のようにまとめています。「各国司教協議会に対し、また自治権を有する（*sui iuris*）諸教会の教会会議（シノドス）に対し、シノドス流で宣教する教会として成長する過程に同伴するための、そしてシノドス事務局との連携を取るための、人材と資源を割り当てるよう勧めます」（9項）。

現代の高度に接続された社会において、 どの教区／東方教会教区も、孤立して生 きることなど考えられません。

したがって、各教会の連合体には二つの役割があります。第1に、彼らには以下のことが求められます。地方教会を刺激することによって、地方レベル、とりわけまだ初期段階にある地域で進行中の歩みを支援すること。各教区シノドス・チーム間の調整とネットワーク化を促進すること。各地域に存在する、シノダリティの養成に関する学校や取り組みからの提案（とりわけチームメンバーや、実施ステージの推進に一番直接的にかかわる人のための）を考慮に入れた養成を提供すること。とくに、シノドス事務局が作成した資料を、現地の文脈によりよくインカルチュレーションすることを目指して、神学的、司牧的考察を促進すること、です。これらの働きを地方レベルで実行することは、より負担が大きく、倍の努力を要することになるかもしれません。そのため、補完性の原理に基づいて、地方教会の役割を損なうことなく、各教会の連合体レベルでの実行が望ましいことがありうるでしょう。

2番目の働きは、シノドス事務局とのコミュニケーションに関するものです。それはますます重要になる場面も多く、たとえば、各地方教会からの意見を集め、それを国レベルの報告書にまとめる必要があるときなどです。この段階の詳細や締切が明らかになった時点で、より具体的な情報が伝えられるでしょう。しかしながら、その過程で生じるあらゆ

る障害を克服する上で、各国司教協議会はシノドス事務局の支援をいつでも受けることができます。

この二つの働きを実行するためには、すでに地方レベルについて述べたように、国や大陸レベルのシノドス・チームを再活性化し、刷新することが重要になるでしょう。具体的な作業を行うのは、彼らにかかっています。

加えて、三つ目の課題があります。つまり、『最終文書』は各国司教協議会を、司教たちの団体性を表現して実現し、各教会間の交わりを促進するための道具であると認識しています。したがって、シノダリティとはまた、司教協議会の機能の具体的なあり方を再考することでもあります。『最終文書』125項には、この点に関する具体的な指示がいくつもありますが、明らかに、個々の地方教会が取り入れることは不可能です。したがって重要なのは、各教会の連合体が、自らのレベルにおいて、シノドス流の進め方について考察と実験を行い、その結果を評価のステージに反映することです。

2.4. シノドス事務局の働き

シノドス事務局は、当初教皇フランシスコから、そしてその後教皇レオ十四世から、2025–2028年の4年間、同伴する歩みを通じて、推進し調整する役割を託されました。

こうした枠組みの中で、シノドス事務局の主要な任務の一つは、たまものの交換の精神をもって、各教会間の「きずなについての回心」（第4部）を見据えながら、交わりをはぐくむことです。この目的のための重要なツールとしては、さまざまな教会の状況において実施してきた経験に耳を傾け、それらについてともに考察を深めることができます。そうすることで、わたしたちは、ともに靈の声を聞き、靈が示す方向に向かって歩を進めることができます。シノドス事務局は、教会間の継続的な対話を促進し、何よりも各教会の連合体、とくに大陸レベルの連合体を通して、コミュニケーションと相互交流を円滑にするよう求められています。この目的をもって、シノドス事務局は各地方教会の声に耳を傾け、そのフィードバックを収集し、それに基づいてメモや資料を作成し、情報や提案を回覧します。さらに本事務局は、互いに耳を傾け合い、旅路とその成果を分かち合い、主への感謝を共同体として表すように導く会合の開催を提案します。

その最初のイベントは、「シノドス・チームと参与機関の祝祭」（2025年10月24–26日）です。その他のイベントの開催方法、および収集されたフィードバックに関する詳細情報は、プロセスが進むにつれて通知されます。当面は、円滑なコミュニケーションとより効果的な調整を確保するため、各教区／東方教会教区は、シノドス事務局のデータベー

スに、各自のシノドス・チームを登録することは不可欠です⁴。司教／東方教会教区司教には、この作業の完了を確認するようお願いします。

シノドス事務局の第2の任務は、主に各教会の連合体、とくに大陸レベルでの連合体のしかるべき組織との対話を通じて、教区／東方教会教区の司教たちと、シノドス・チームに同伴することです。しかしながら、可能な限り、本事務局はまた、個々の地方教会、奉獻生活の会、使徒的生活の会、諸団体、運動体、新しく創立された共同体、あるいはそれを要請してきたその他の教会組織にも同伴する用意ができており、その際、より資源の少ない教会を優先します。本事務局は、「扉を開いたままにする」⁵ことを約束し、各地方教会からのニーズ、洞察、提案に耳を傾け、実施ステージの内容と方法に関する要望に応えることで、彼らの活動を促進します。

とくに重要な点は、各教会がシノドス流のアプローチをもってその旅路を進むよう励ますことです。すでに実施ステージを始めている人々の体験によると、内容や決定事項も重要ですが、それらがどのように取り組まれるかも同様に重要であると確認されています。適切な組織や規範は不可欠ですが、それだけでは不十分です。シノドス流の教会であることの展望とすばらしさは、耳を傾け、識別と意思決定のプロセスに参加する経験を直接した各共同体によって、その偉大さすべてが理解されてきました。シノドス事務局が今後も継続して、注意深く時宜にかなった働きを提供しようとしているのは、まさに、司教たちの指導のもと、多くが福音の喜びに満たされた、こうした具体的で共有された体験に対してなのです。

第3の任務は、ローマ教皇庁の権限のある部署と協力しながら、全大陸からの司牧者や専門家たちも参加している「研究部会」の調整を続けることです。教皇レオ十四世は、この任務と、二つの新しい研究部会（それぞれ「シノドス的視点からの典礼」と「司教協議会、教会会議、部分教会会議の規則」について）の追加を認証しました。これらの研究部会の調査結果に基づいて展開する教皇の決定が、進行中のシノドスの旅路に、確かに調和して統合されるようにすることもまた、シノドス事務局の責任です。シノドスの歩みの中で現れてきた諸課題をさらに探求していくとする視点をもって、本事務局はまた、会合や研究セミナーを推奨し、共同の検討や神学的・司牧的考察の機会を育成します。

最後に、「大陸別評価会議（continental evaluation Assemblies、2028年第1四半期）」の開催に同伴すること、また、2028年10月の「教会総会（Ecclesial Assembly）」を組織

⁴ 各シノドス・チームは、synodus@synod.va のリンクにアクセスして、シノドス事務局のデータベースに登録することができます。この登録は、「シノドス・チームと参与機関の祝祭」への登録とは別のことです。

⁵ 連絡は、synodus@synod.va までお願いします。

することが、とりわけ重要な任務となるでしょう。こうしたイベントを踏まえ、評価とは、裁きや統制の一形態ではなく、むしろ実施と回心のプロセスにおいて、どこまで到達してきたかを自問し、実現できた進歩を強調し、改善点を特定する機会であることを繰り返し述べることは有益です（100 項参照）。つまり、2027 年から 2028 年にさまざまなレベルで計画されている教会会議は、こうした観点で捉えられるべきであり、受けたたまものを祝う機会となるでしょう。そうすることでわたしたちは、キリストから受けた使命を、現代の具体的な状況の中で遂行することに専心するシノドス流の教会として、ともに成長を続けるのです。それらの会合はまた、それぞれの人が分担する共同責任を視野に入れ、誠実かつ創造的な仕方で、シノダリティ、団体性、首位権を組み合わせる具体的な方法を実践する機会ともなるでしょう。

これらの会合の手順や取り上げるテーマに関するより具体的な詳細は、事前の対話の過程、およびそれらについて検討も行う新しい研究部会の成果から決定される予定です。すでに予想できることとしては、これらの会合は、個々の教会が、最終的に有効とするために教皇に提出するほど十分に統合・整理されたとみなす、シノドス流の観点から見た実践と組織の刷新の体験を共有する機会となるでしょう。それらはまた、その過程で不可避的に生じるであろう問題について、ともに検討し始める機会ともなるでしょう。

『最終文書』を読むためには、耳を傾
け、対話することの師（51 項参照）で
あるキリストを中心におき、靈の働きに
開かれた、共同体としての祈りと個人と
しての祈り両方に裏打ちされ、支えられ
ている必要があります

3. 実施ステージの間

『最終文書』にどう取り組むか

『最終文書』は、実施ステージにおける参照点です。したがって、本文中で繰り返し引用されます。結果として、とりわけ、シノドス・チームのメンバーや、さまざまなレベルで実施プロセスを牽引する役割が求められている人々の間で、その理解を深めることが不可欠です。『最終文書』は内容豊かで包括的な文書であるため、この文書を熟読するための研修、支援、指導の機会やツールを（地方、国、地域レベルで）提供することが適切でしょう。それによって、人々は、単に取り上げられている諸課題について知識を得るだけでなく、この文書を動機付けている考え方を把握することができるでしょう。

第1に、『最終文書』を読むためには、耳を傾け、対話することの師（51項参照）であるキリストを中心におき、靈の働きに開かれた、共同体としての祈りと個人としての祈り両方に裏打ちされ、支えられている必要があります。つまり、この文書の抽象的な分析だけでは不十分なのです。『最終文書』は、教会全体と、洗礼を受けたすべての人に、回心の旅の展望を提案しています。「宣教への召命は同時に、各地方教会での回心と全教会での回心への召命でもある」（11項）のです。あらゆる回心の旅と同様に、それには、洞察を深め、内面を清めるプロセスが必要であり、個人レベルでは選び、行動、生活様式を変えることにつながる可能性が高いでしょう。共同体レベルでは、シノドス的な意味で、思考や文化の枠組みを刷新することが、新たな実践や刷新された組織を展開する基礎となるでしょう。

『最終文書』は、長年の聞き取り、議論、識別の歩みの成果である、それ独自の内的なダイナミズムによって刺激を受けた、包括的な文書です。したがって、この文書は、想定されていた文脈から切り離しうる、多様な課題に関する指針の寄せ集めと見なすことはできません。そうすることで、文書の真意はつかみえず、その結果、適正に実施することができなくなります。このことは、文書の構成自体から明らかです。

事実、第1部では、これまでの旅の成果である、シノダリティに関する共通理解が提示され、第二バチカン公会議に根ざした、その神学的、靈的基盤が概説されています。その対極にある第5部では、全体的な視点を取り上げ、宣教するシノドス流の教会として成長するためには、神の民全員の養成に配慮することが必要であることをあらためて指摘しています。結びでは、神の民全員が協力するよう招かれている、共通の使命を導く終末論的展望が思い起こされます。

この意義深い枠組みの中で、第2部、第3部、第4部では、教会生活における特定の具体的な側面に焦点を当て、その刷新のための提案がまとめられています。とくに第2部は、「かかわりの転換に焦点を当てています。かかわりが、……召命、カリスマ、奉仕職が織り合わされていく」（11項）のです。第3部は、「宣教に向かう変容」のプロセスを始

動させるための三つの重要な実践（教会的識別、意思決定プロセス、透明性・説明責任、評価責任を担保する文化）を特定し、参与機関を刷新する緊急性を強調しています。第4部では、「たまものの交換ときずなを編むことを、新たなかたちで促進させる方法を概説します」。「特定の地に根ざす暮らしが変貌する今という時代には」「それらは教会においてわたしたちを一致させる」（同）のです。また、各国司教協議会や教会会議の役割、そしてローマの司教の働きについて考察しています。

3.1. 全体的ビジョンの維持

『最終文書』の主要な内容を要約すると、文書の全体像を把握する障害となる可能性が十分にあるため、それはせずに、ここでは文書全体にわたり見つかるいくつかの主要な要点を強調し、一貫性をもって文書を提示し、意思決定を方向づけ、評価する基準を形成する方が適切であると思われます。まさにこの視点から、『最終文書』の提言を実施するための具体的措置は、以下の点に根ざすべきです。

- a) 第1に、『最終文書』は、第二バチカン公会議に根ざした、参考すべき確固たる教会論的視点を提案しています。すなわち、シノドスの旅路は、実際、「公会議が、福音に聞くことから生まれる回心の連続によって聖性へと招かれている、神秘体であり神の民である教会の姿について教えたことを……体現しています」（5項）。福音に聞くとき、一人ひとりのメンバーは、男性も女性も、聖霊のたまものを受けていることを自覚しています、
- b) 神の国をのべ伝える宣教は、イエスによって始められ、すべての洗礼を受けた人が、それぞれ自らのカリスマ、召命、奉仕職の特質に応じて招かれており、その宣教は、本文書の骨格と、最終的な到達点を形成しています。採用すべきツールや実施すべき改革に関する考察は、つねにこの宣教の視点のうちに置かれるべきであり、それこそが、これに関するすべての識別の根本的基準となります。とりわけ『最終文書』は、教会がますます勇気をもって、出向いていくようになることを強く推奨しております、それは、各共同体が、「内輪の活動や組織の必要にばかり専心するのではなく、信者が家庭や職場といった社会において果たす宣教への奉仕を第一義」（59項）と考えるよう要求するほどです、
- c) 関係性の視点とたまものの交換の論理は、普遍（カトリック）性の表現として、『最終文書』全体を貫く、もう二つの主要な線であり、したがって、それを理解し実施する指針となるものです。これは、叙階された奉仕者たちの姿の中に明確に見いだしうるもので、互いとの、また神の民全体との総合的な関係の中であったり（『最終文書』69-74項参照）、または、司教同士の交わりを通じた、各地方教会間のきずなが表現するものの中で見いだせます、

- d) エキュメニズムの動向は、関係性の視点の発展とたまものの交換の論理を反映しています。したがって、それは任意に付け足すものではなく、わたしたちがともに旅するダイナミズムを評価する際に用いることのできる必要条件です。
- e) 最後に、『最終文書』は、すべての人、他の宗教伝統（41 項参照）、共同体全体（42 項参照）と対話する、世界における教会という公会議のビジョンを掲げています。対話のできる、シノドス流の教会として成長することは、社会正義と総合的なエコロジーに取り組むことを含む、預言的な価値をもっています。これらの側面は、実施ステージにおいて無視することはできません。わたしたちが暮らす地域や社会の具体的ニーズに基づいた、対話の機会の創出につながるものです。

上記の主要な方向性に加えて、『最終文書』を活性化し、実施ステージが担うべきダイナミズムは、教会生活を構成する特定の対立や緊張関係、そして教会論的範疇（カテゴリー）がそれを表す表し方が、絶えず明瞭に表現されていることから生まれています。そうした対立は以下のようなものです。教会全体と地方教会、神の民としての教会・キリストのからだとしての教会・靈の住む聖所としての教会、全員の参加と幾人かの権威、シノダリティ・団体性・首位権、共通祭司職と役務的祭司職、奉仕職（叙階され制度化された奉仕職）と洗礼の召命による宣教への参加（奉仕職の形をとらない）、などです。『最終文書』の実施には、各地方教会が置かれている状況において生じるこうした緊張関係に対処し、識別することが必要です。前進すべき道は、一方の側を優先して緊張を排除するような、不可能な調整を模索することではありません。むしろ、各地方教会が「今、ここで」、より活力に満ちた宣教の働きを可能にするには、どのようなバランスが可能かを識別する必要があります。異なる場所で、異なる決定が下されることもあるでしょう。このため、多くの地域で『最終文書』は、地域における実験の余地を一部残しています。たとえば、種々の奉仕職（66、76、78 項参照）、意思決定プロセス（94 項参照）、説明責任と評価（101 項参照）、参与機関（104 項参照）などに関するものです。個々の教会は、これらを活用するよう招かれています。

現在の社会・文化的状況において、これらの緊張関係の一つがとくに新たな諸形態をとるようになり、自覺的な努力を要する状況となっています。このため、『最終文書』はこれに 1 節を割き、重要なタイトル、「根を下ろし、そして旅する人たち」と付けています（110-119 項参照）。伝統的に、地方教会が神の民の一部として定義され、人々の帰属意識の基盤となるのは、空間的・地理的な意味で理解される「場所」との結びつきによってです。都市化、移動や移住の増加、デジタル文化の普及などの現象は、人々の帰属意識の在り方を大きく変えています。つまり現在では、共同体との結びつきという人間のニーズは変わらないものの、帰属意識は空間的環境より、関係性のネットワークを意味するようになっています。実際、その結びつきが弱まることで、創造性ある宣教努力がますます緊急

に必要となり、教会が人々のところへ出向き、彼らがいる場できずなを築くことができるようになるのです（110-119 項参照）。

評価のステージでは、成功事例を共有する観点から、対立や緊張関係の中で生きる各地方教会の体験の実りや、創造性ある宣教活動の成果を収集することが重要になるでしょう。

3.2. 具体的取り組みへの資源投入

聖靈に耳を傾けつつ、『最終文書』が第二バチカン公会議から受け継いだ教会論の中にあって、実施ステージの具体的目標は、文化、人間関係、教会実践の回心のステップ、さらに結果的に、組織と機関の改革のステップを識別することです。これは、歩み全体において極めて重要なポイントです。「短期間で具体的な変化がなければ、シノドス流の教会というビジョンは信頼を失い、このシノドスの旅から力と希望を得た神の民のメンバーを遠ざけてしまうことになります」（94 項）。

「これらの変革を実現する適切な方法を見いだすことは、各地方教会の責務」（同）と、『最終文書』は繰り返し強調しており、実際、これは実施ステージで取り組むべき任務です。したがって、『最終文書』が注目する多くの分野の中から、世界中で優先すべき分野を指摘することは不可能です。各地方の状況から、他の地域では同じように優先順位の高くない特定の課題が、その地域では重要で緊急なものとなることがごく普通に起こります。つまり、ある地域においてはラテン教会と東方諸教会との関係、あるいは、他の地域ではエキュメニカルな動きや諸宗教対話、といったケースです。これらの場合には、ともに歩むという取り組みに対し、構造的、制度的なものも含め、具体的な形を与えることが求められるでしょう。

同時に（そして前述のように、教会全体と地方教会との二極化についていえば）、教会全体としてともに前進していくこともまた、急務となっています。実際これが、同伴と評価のプロセスを開始した主な理由です。

こうした状況において、各地方教会が自らの状況に応じて『最終文書』の指針を実施する責任を考慮すると、すでに予見しうることですが、「2021-2024 年シノドス」の歩みに基づき、各地方教会は、もっとも適切と思われる方法と形態で、特定の分野において実施された取り組みを共有することが求められるでしょう。これらの分野には、以下のものが含まれます。

- a) シノドス的靈性の促進 (43–46 項参照)、
- b) 信徒であるか、奉獻生活者であるかにかかわらず、叙階を受けていない男女のための、叙階の秘跡を必要としない責任ある役職や指導的役割に実際に就くことができること (60 項参照)、
- c) さまざまな文脈における司牧ニーズに応える働きや奉仕職の形態の研究・開発 (75–77 項参照)、
- d) 教会的識別の実践 (81–86 項参照)、
- e) シノドス流の仕方による、意思決定プロセスの活性化 (93–94 項参照)、
- f) 適切な、透明性・説明責任・評価の形態の研究・開発 (95–102 項参照)、
- g) 教区および小教区において、法にしたがって参与機関を設置する義務、およびそれらの運営方法の、シノドス流への刷新 (103–106 項参照)、
- h) 地方ならびに地域の教会会議の定期開催 (107 項参照)、
- i) 教区代表者会議 (教区シノドス) および東方教会の当該会議 (エパルキア会議) の推進 (108 項参照)、
- j) シノドス流の、宣教精神に満ちた小教区への刷新 (117 項参照)、
- k) キリスト教入信の旅 (142 項参照)、および、一般的に、その人々に対する養成プログラムと機関 (143–151 項参照) のシノドス的性格を確認すること。

これは決して完全なリストではなく、各地方教会からのフィードバックに基づいて、今後さらに充実させていく予定です。

4. 実施ステージの間、わたしたちの進路を形づくるため

どの方法やツールが役立つか

シノドスの歩み全体を通して、対処すべき諸課題に適した方法を手にすることがいかに重要であるか、ということが明らかになってきました。実際、シノドス流の教会を築くときには、内容と方法が非常によく一致するものです。つまり、キリストにおける兄弟姉妹として、教会のシノドス的次元をよりよく生きる方法について集まり、対話することは、このテーマをより深く理解するための、シノドス流の教会体験そのものとなるのです。したがって、シノドス的方法とは、会議を運営するための一連の技法に留まるものではなく、新たな教会のあり様へと成長する、靈的かつ教会的な体験です。それは、信仰の感覚 (*sensus fidei*) に始まり、靈がそのたまものを、すべての洗礼を受けた人に授けるという信仰に根ざしています (81 項参照)。それは技法ではないため、その方法論は望ましい結

果を保証するものではありません。なぜならそれは、旅に参加する人々がいかに耳を傾けることに開かれているか、そして兄弟姉妹との交わりのうちに、いかにキリストの靈によって自らを喜んで変容させられるかによるからです。これは、『最終文書』が教会全体に呼びかけている、シノドス流への回心のもう一つの側面です。

4.1. 教会的識別

『最終文書』81-86 項は、簡潔かつ明快に、教会的識別の要点、つまり、シノドス流の教会独自の方法論について概説しています。わたしたちは、「教会には、多様性に富んだ識別の手法と確立された方法論がある」(86 項) ことを認識しつつ、これらの項を参照する必要があるでしょう。この点に関して、思い起こすべきは、シノドスの歩みの中で、間違いなく特徴的要素であり、その成功要因でもある「靈における会話」が、評価されるべきであることです。ただしそれは、唯一のシノドス的方法というわけではなく、何よりも、教会的識別と同義語なわけでもなく、教会的識別のための一つのツールや準備として機能するものだということです。

『最終文書』の 85 項で言及したように、教会的識別のためには、状況をより深く理解し、何が問題となっているかをより明確に把握するために、さまざまな専門知識からの貢献が必要です。こうした貢献が、靈における会話のダイナミズムの中で適切な場を見いだすことは容易ではありません。なぜなら、この会話は、何よりもまず、出会いのため、関係性の中における成長のため、そして「わたし」から「わたしたち」へ移行するための道具だからです。最終的に、実施ステージでは、実践や体制を刷新するための具体的な決定が必要となるため、その意思決定プロセスは十全に教会的で、権威、とりわけ教区／東方教会教区の司教の権威に特有の役割を認識したものでなければなりません。彼らは、そのゆだねられた教会内、および諸教会間の交わりの第一責任者であるからです。

実践面から考えると、良い識別プロセスのための必要条件として、その目標を明確に定義することは不可欠であり、それは利用可能な時間、利用できる空間、参加者数に対し、現実的で適切なものでなければなりません。さらに、最初の心構えも軽視できません。つまり、各参加者が十分に準備を整えて臨み、耳を傾け対話するために祈りの雰囲気と心が開かれた姿勢を生み出す環境が重要です。こうした観点から、思い起こすべきは、シノドスの歩みが適切なファシリテーションによって支えられていることが、いかに重要で実り多いものとなるかを、経験は訴えている、ということです。こうしたファシリテーションには、この方法論を適切に守り、適応し、突然の混乱を避け、参加者が識別すべき諸課題によりしっかりと集中できるようにする、養成を受けた人々が必要なのです。

4.2. 歩みを設計し、同伴するためのシノドス的アプローチ

これらの方法論の指針は、さまざまな状況やプロセスに適用できます。その目標はさまざまですが、シノドス流の仕方で実施されるという共通点があります。即興的になったり拡散的になったりするリスクを回避しながらこれらを実施するには、こうしたプロセスの設計と同伴に資源を投入することが望ましいでしょう。ここで、いくつかの例を紹介します（これで網羅しているということではありません）。

- a) 教会的識別のプロセス。それは、宣教の優先事項を特定するため、ならびにシノドス流の教会にふさわしい統治の形態と手順を特定するためのものです。この二つの要素にはそれぞれ、今後の旅路を計画する際に考慮すべき特定の必要条件が含まれています。これらのプロセスの設計と同伴には、上記指針を実施するのを支援できる、経験豊富な人材を充当する必要があります。
- b) シノダリティに関する養成コースのプロセス。それは、『最終文書』第5部の提言にしたがい、また対処すべき多様な養成のニーズも考慮し、その結果、それぞれの道程が有する具体的目標を明確にしようと努めるものです。多くの場合、もっとも効果的な養成の方法論は、シノドス流の教会として体験した経験について、そこで現れた長所と短所を明らかにしながら、祈りの雰囲気の中で分かち合い、内省することです。この理由から、教会的識別のプロセス、シノドス流の意思決定プロセス、あるいは参与機関の役割について考察することは、伝統的なモデルにしたがって構成された講座よりも、養成のためのより強固な価値をもちえます。ここでも、熟練したファシリテーターの存在が不可欠となります。したがって、こうした人材養成を提供することも必要となるでしょう。
- c) 共同体の中で耳を傾け対話するプロセスと体験。それは、地方レベル、地域レベルでのものです。体験から、デジタルツールもこの目的のための重要な資源となることが分かってきました。既に述べた精神に基づき、これらの体験を祈りの雰囲気の中で行い、振り返りを分かち合う時間を確保することは重要です。そうすることで、その成果は高く評価されるでしょう。
- d) 体験を祝い、それに出会い、交換すること。それは、教区内の共同体間であったり、同地域の教区間であったりするでしょう。ここでもデジタルツールは有効ですが、しばしば多くの人を結びつける、聖地巡礼のような民間信心に結びつくイベントの潜在力を過小評価してはなりません。いかにすれば、こうしたイベントが活性化され、より明確にシノドス的性格を帶び、人々の出会いと対話を促進することができるでしょうか。
- e) コミュニケーションのプロセスと活動。それは、キリスト教共同体と、その共同体が生きる社会の両方を対象とし、それぞれの状況に応じてもっとも適切な手段を用いま

す。コミュニケーションのための新しいデジタルチャンネルの潜在力を探求することもまた、有益でしょう。今日、このチャンネルは、とくに若者たちにとって、そこで生き、人間関係を築くための真の環境であり、その中で福音を告げ知らせる声がしっかりと響き渡ります。「デジタル・シノドス」の経験は、この点において一つの資源となります。

- f) 司牧活動の刷新のための道筋。それは、各地方教会に関連する具体的な分野やテーマ（たとえば、主日の祭儀へのより能動的参加の促進、信仰教育のプログラム、エキュメニズム対話、移住者の受け入れ、わたしたちの共通の家の保護の取り組みなど）におけるものであり、シノドス的アプローチの影響を目に見える形にする取り組みを実施し、その成果を検証します。これにより、シノダリティの地平が、共同体の具体的な生活へと変換されるよう助けられます。
- g) 神学的、司牧的、教会法的研究の道筋。それは、その地方の文脈における特定の側面や、教会間の対話の中で、今回のシノドスを実践するためのものです。この重要な働きによって、神学者は、「啓示によって照らされた現実の理解を神の民が深めるのを支え、宣教に適した返答やふさわしい表現を練り上げることを助けます」（67項）。このことはまた、教会がシノドス的次元をこれまで以上に完全に生きられるよう同伴する特別な責任を、神学を担う諸機関の側に生じさせます。

シノドス的方法論によって、意見聴取と聞き取りのステージ、さらにシノドス総会の2回の会期の間、わたしたちは聖靈によって驚かされ、想像を超える成果を享受することができました。受け取ったたくさんのまとめや文書から明らかのように、多くの参加者が驚嘆と熱意を抱きました。つまり、信者の間、司牧者の間、教会の間の交わりは、シノドスの歩みと行事に参加することではぐくまれ、共通の宣教に対する共同責任の機運と感覚は刷新されたのです。これは、「シノドス・チームと参与機関の祝祭」をはじめ、今後数年間にわたってわたしたちを待ち受ける旅路を見据える上で、自信を与えるものです。わたしたちはすでに、その祝祭を準備するためにできる限りの努力をしています。それによって、実際に聖なる扉に向かってともに歩む機会が、たまものを交換し、失望させない希望を祝う機会となるのです。その希望は唯一、主イエスが弟子たちに託した宣教を、シノドス流の教会として前進させるというわたしたちの取り組みに力を与えることができるのです。

シノドスの歩み

2028年に向けて



耳を傾け、出会い、対話し、
識別するプロセス



2021年10月9-10日

シノドスの歩み 開幕



2021年10月17日

シノドスの歩み 各地で開幕



地方教会

各国での意見聴取

大陸ステージ

特定地域の教会間対話



2023年10月4-29日
シノドス第16回通常総会第1会期

2024年10月2-27日
シノドス第16回通常総会第2会期



2025

3月 同伴と評価プロセスの発表

7月 『実施ステージの旅程』

10月24-26日 シノドス・チームと参与機関のための祝祭

2025 6月 - 2026 12月

各地方教会とその連合体における実施のための活動

2027

上半期

教区／東方教会教区における評価集会

下半期

各国司教協議会およびその連合体、東方諸教会の位階的組織、その他の教会の連合体における評価集会

2028

第1四半期

大陸別評価集会

10月

バチカンでの「教会総会」開催

